

「書に道あり」

ヤスパゼン・マルテ
(日本語訳 石川桂子)

要 旨

ドイツでは第二次世界大戦後、ラジオドキュメンタリー (Radio Feature) が、音響芸術の新たなジャンルとして確立された。ラジオドキュメンタリーは、ラジオドラマと異なり、事実即ちノンフィクションを扱う。音楽、言葉、サウンドが果たす役割は番組によってさまざまであり、ドキュメンタリーの形態には多種多様なものがある。BBC でかつてドキュメンタリー部長を務めたジョン・シオカリスは、「ドキュメンタリーは、ラジオが持つあらゆる可能性を駆使し、聴く人の想像力をかきたて、世界や人間の存在への理解を深めさせようとする」と述べている。

本稿は、ラジオドキュメンタリー「書に道あり」の原稿である。書道の特徴や歴史は、ドイツの大半の聴取者にはあまり知られていないが、この作品は、そうした書道の世界を取り上げたもので、長期にわたる取材活動の集大成である。またこの番組は、書道という完全に視覚的なテーマを音響 (ラジオ) で表現し、それによってドイツの聴衆が持つ日本のイメージに一層の幅と深みをもたらすことを狙うという、メディア技術的にユニークな試みでもある。「書に道あり」は、ベルリン・ブランデンブルク放送局番組制作班より、国際メディアコンクール「2009年イタリア賞 (Prix Italia)」の参加作品として推薦された。

キーワード：書道、ラジオ、ドキュメンタリー、文化、マスメジャー

「書に道あり」

- 祥洲 「書は自分の存在そのもの。自分の全て」「一生学んでいきたい、唯一のもの」「この道に進むために全てを賭けた。死ぬまでに、たとえ一点でも素晴らしい書を書きたいから」
- 語り手1 日本語の「書道」という言葉は二つの漢字から成る。
- 語り手2 「書く」と「道」である。
- 語り手1 「カリグラフィー」という訳語は、本来、「書道」の本質を伝えていない。ギリシャ語の「kallos (美)」に由来する「カリグラフィー」とは、「美しい文字」という意味なのだ。
- 祥洲 「書くのは一瞬のこと。そこに最高の感動を込める」
- 語り手1 書道で大切なのは、美しい字を書くことではなく、内面の動きを表現すること。書道とは、目標のない道なのだ。

-
- ヤスパゼン 我が「道」が始まる。山寺，がらんとした部屋，人里離れた生活，禁欲といったイメージが頭に浮かぶ…。祥洲の教室は，京都駅南側の狭い通りにある。ここで私は書を学ぶのだ。教室はとても狭く，屋根も低い。壁には墨汁のはねた跡や，阪神タイガースのポスターや，ミロの版画がある。部屋の隅には，エレキギターが置いてある。我が道の始まりにあたり，最初に受けた指示は「頭をぶつけないようにね！」だった。亀がいる水槽の横に腰を下ろす。
- 語り手1 祥洲。三十年来，墨アーティストとして活動。日本，中国，韓国，ヨーロッパで展覧会を開催している。
- 祥洲 「V字型の動きで墨を摺ってください。歪まないようにね」
- 語り手1 祥洲は京都と東京で書を教えている。二百人の教え子のことを「メンバー」と呼ぶ。メンバーには，近所の人もいれば，電車で来る人もいる。南日本から行き八時間，帰り八時間かけて車で通ってくる女性もいる。
- 祥洲 「それでは，線ができるだけ手本と同じになるように書いてみてください」
- ヤスパゼン 手本。それは，約千年前の平安時代の歌。縦書きの三行の文字は，優雅に弾む繊細な流線。まるで水面に映る日の光のよう。エキゾチックで魅惑的だ。筆画のリズムを真似ようと，私は手本の上に薄い紙をのせて透写してみた。
- 祥洲 「あなたには，漢字を捉えるのが他の人よりも難しいでしょう。最初は，意味ではなくまず形に気をつけてみてください」
- ヤスパゼン 透写した後は，同じ和歌をフリーハンドで何度も何度も書き写した。書いたものを多少なりとも会得したというには程遠いが，書くときの筆の動きが少しだけしっかりしてきたのを感じる。
- 祥洲 「今では日本人も，こんな古いかなを書くのは習字を習っている人ぐらいです。日本人にとっても難しい。雰囲気は上手く捉えましたね。ただし字を一杯間違えましたね」
- ヤスパゼン 一時間半後，初回の授業が終わった。まるで墨の海に突き落とされたような感じがした。足が地についていない感じだ。ただし，頭だけはぶつけずに済んだ。
-

語り手2 / 語り手3

「私にとっての書道ですか？心が一番安らぐものです」
「人生の楽しみ」

「当たり前なもの。小さいときから書いていたから」
「自分を表現する一つの手段」
「身体の深いところにあるもの」
「生きがい」
「なくてはならないもの」
「私は書によって生かされている」
「自分の表現と古来からの伝統が組み合わせられて、人生を豊かにする」

- 語り手1 書の芸術は、とても古く、かつ極めて現代的だ。書は、テレビCM、包装、店看板、会社のロゴに趣を添える。コンピュータや携帯電話の影響で、複雑な漢字が書けなくなる日本人がますます増える時代に、有名な書家が新聞のコラムを書き、若手がテレビに出演する。
- 語り手2 日本人と中国人が並んで立っている。互いに相手の言葉が分からない。一方が人差し指で手のひらに漢字を書く。漢字は中国の表意文字であり、日本文字の基礎だ。もう一方の側も、手のひらに文字を書いて答える。
- 語り手1 西洋の文字は、話された言葉を書き写したものだ。アルファベットは音を表記するが、音は、組み合わせられてはじめて意味を成し、単語になる。これに対し、中国の漢字は完結した概念を表す。この文字に声は必要ない。意味を捉えるためには、発音できなくても構わないのだ。漢字には、極めて抽象的なものも多くあれば、優れて簡略化した形で森羅万象を写したのものもある。

- 祥洲 「上から左下にゆるやかな曲線を引いていきます。真ん中あたりから二本目の線を斜め右下に持っていきます」
- 語り手1 頭と腕のない上半身に、歩く格好の二本の足。「人」。
- 祥洲 「今度は、例えば…」
- 語り手1 真っ直ぐな四角の中央に二本の横線。上下のまぶたー抽象化した瞳。「目」。
- 祥洲 「そして…」
- 語り手1 「目」という字が「人」という字の下半分の上に乗っている。足のついた目。動く目。すなわち「見る」。
- 天に向かって伸びる縦線。横線は地面だ。その下に、地中に広がる三本の線。根。「木」だ。木という漢字二つで「林」、三つの小さな木をまとめて書くと「森」。

優美な縦長の字。軽く左に開いているのは、まるで草刈鎌のよう。内側には、薄い雲のすじにもとれる二本の横線。「月」だ。

西邑由記子

月は舟

星は白波

雲は海

いかに漕ぐらん

桂男はただひとりして

(「梁塵秘抄」より)

ヤスパゼン

書には四つの道具が必要だ。「文房四宝」という。一つは筆だ。私はイタチの毛の筆を選んだ。安価でしなやかなので初心者向きなのだ。

祥洲

「筆は完璧な筆記具。だから筆の形は何千年も変わっていないのです」

語り手 1

筆は手の重みに合わせてしなり、それからまた尖った形に戻らなければならない。それでこそ筆画に様々な強弱をつけられるのだ。筆は竹と毛でできている。

語り手 2 / 語り手 (男性) 1

兎—羊—鹿—タヌキ—イタチ—馬—猫—猿—虎—狼—ネズミ—鶏—キジ—孔雀—初散髪

祥洲

「筆師さんと協力して、毛の質をどうするか、毛を何本集めるか、直径は何センチにするかを決めます。また筆の軸はどんな竹がいいかということや、重さや長さを決めます。そういうチューニングをしながら、自分の手に完璧に合う筆を作ります」

語り手 1

古代中国の黄帝は、仕官である蒼頡（そうけつ）に文字を発明するよう命じた。蒼頡には目が四つあり、宇宙の神秘を見抜くことができた。彼が最初の文字を書き留めたとき、不思議なことが起きた。天の神が地上に穀物を降らせ、暗闇では鬼のうめき声が聞こえた。鬼たちは、新しい文字が彼らの残酷さを露にしたので震撼したのだ。神々は、文字の発明が人間に知恵を授ける一方で、ずる賢さとあくどさももたらすことを知っており、人々を気の毒に思い穀物を贈った。そして文字の力を発見した蒼頡は漢字の神様となった。

ヤスパゼン

私はあることを発見した。日常的過ぎて長い間気がつかなかったことだ。私の目は、読むときに左から右に動くのだ。向かいの女性の目は、上から

- 下になぞっている。
- 語り手 1 三千四百年前、神々に対する問いかけや願いごとを文字に記し始めた中国人は、牡牛の肩甲骨や亀の甲羅に文字を刻みつけた。
- 語り手 3 亀の甲羅は宇宙を表していた。平らな腹は地上で、丸い背中は天空。象徴化されたこの宇宙に、神託を問う言葉や祈りが刻まれた。
- 語り手 2 「雨は降るだろうか、日は照るだろうか」「豊作だろうか、凶作だろうか」
- 語り手 3 亀の甲羅は一本の縦線「天への道」によって左右対称に分割される。これは、人間と神との交信の書字方向を定める線だったと考えられている。つまり、上から下、天から地への縦の線だ。今でも、この垂直性に沿って個々の字画の均衡が保たれているのだ。
- ヤスパゼン 縦書きには全然慣れていない。書くときに腕を曲げていなければならないし、手を置いてはいけない。私の字はふらついている。
- 祥洲 「一番気に入らないのはどれですか。これ？じゃあちょっと筆持って。一緒に書いてみましょう。一緒に…息を吸って…息を止めて…調子はまだです。ね。力が入っていないくて、線がふらついている。もっとしっかりと力を込めて」
-
- 語り手 1 骨や亀甲羅に続いたのは、青銅、木、竹、布、そして紙だった。西暦元年前後、古代の表意文字は三つの発展段階を経た。いわゆる「篆書」、簡略化された「隸書」、そして現代でも使われる「楷書」だ。
- 語り手 3 三世紀、文字は流れるようになる。行書は、走り書きされた文字と文字を線で結ぶようになる。
- 語り手 1 そして草書が生まれた。極めて個性的で、リズム感に溢れ、解読がとても難しい書体だ。文字が踊り出したのである。
-
- 祥洲 「息を止めて筆を置きます。息が切れるまで止めるぐらいにして、動く。一、二、三…。下の部分に来て、それから最後の一画」
- 祥洲 「舞う」
- 以倉千壽 「ダンスのために書いてくれと言われたとき、最初は何が何だか分かりませんでした」
- 語り手 1 以倉千壽は、振付師のダニエラ・クルツから、ニュルンベルク州立劇場のプロダクション「ズーミング3 書家の目の中で」のために書を制作するよう依頼された。
- 語り手 2 「でもダンスを見て、書を書くときの感じに似ていると思いました」

- 語り手1 以倉の制作プロセスがビデオに撮影され、舞台床に投影された。ダンサーたちは、筆の動きや墨の流れに合わせ、対話をするかのように動いた。
- 以倉千壽 「動き、リズム、スピード、緩急。ダンスにはさまざまな形があるでしょうけど、ダンサーも、書と同じように自分の中に自分の動きを見つけていくのでしょうか」
- 語り手3 伝統一技術と完璧—様式化と簡素化—個性と芸術的自由。
- 以倉千壽 「書かれた線もダンスも、身体の中から出てくるものです。ダンスは鍛え抜かれた身体の究極の動きでしょう」
- 語り手3 瞬間—真髓—傾注—独自性—呼吸—集中—官能—美—静寂。
- 以倉千壽 「書の動きはそれほど激しくないけれど、集中力は同じです。精神と筆を持つ手が一体にならなければいけない。ニュルンベルクの作品を見てから、中国の古典に対する見方が変わりました。ダンスの動きを感じるようになったのです」

語り手2／語り手3

- 「どうして書道をやるかですか？一週間に一度は墨の匂いを嗅がないと、リズムが狂ってしまうんです」
- 「文字が持つ造形も意味も面白いです。始めたばかりなので、まだ整理されていませんが」
- 「自分が強くなればなるほど字にも表れてきます。自分が弱ければ文字も弱い。だから書は、自分の内面を見る手段の一つなのです」
- 「和菓子用包装の商業デザインの仕事をしています。それらしい書が書ければ、仕事に活きると思います」
- 「精神面を鍛えたい」
- 「書によって自分の考えているものを形にすることができる」
- 「店舗デザインの仕事をしていたり、メニューを書いたり墨を使って描いたりしているうちに、書に対する興味がわいてきました。墨だけで表現するということに、どんどん興味が深まりました」
- 「書いているだけで心が落ち着きます」

- ヤスパゼン 私が日本に来て最初に経験したことのひとつ、それは、学ぶべき文字は一種類ではなく三種類だということだ。中国から伝えられた漢字、それに表音文字のひらがなとカタカナだ。カタカナは現在、主に外来語や外国の名前などを記すのに使われる。しかし事はそれだけで済まなかった。漢字には、

音読みと訓読みがあるのだ。大変ややこしそうに聞こえるし、実際にややこしかった。これらのことをしっかりと理解するまで、長い時間がかかった。

語り手 1 中国の表意文字は、すでに紀元一世紀、外交使によって日本にもたらされた。しかし漢字が普及したのは、仏教の導入以降だった。漢字は、それまで独自の文字言語を持たなかった日本に、宗教や政治に関する幅広い語彙をもたらした。その後、漢字を書くことは、中国同様、詩や画と並んで学識者たちの知的嗜みとして欠かせないものとなった。出世に不可欠の要件となったのだ。

語り手 3 ただし漢字には問題があった。読むことはできても、発音が日本語に合わないのだ。そこで二種類の読み方が生まれた。音読みと新しい日本式の訓読みだ。しかしそれで問題が解決されたわけでは全くなかった。

語り手 1 日本最古の文学は、中国から導入された表意文字で書かれた。しかしその表意文字は、表音アルファベットのようには、すなわち純粋に音的に使われた。そのようにして書かれた文は、声に出して読む場合には問題なく理解できた。音によって編み出されるのは、意味のある日本語の単語だからだ。しかし目で読むとなると混乱を招いた。というのも、個々の漢字が表す音とともに、漢字の元来の字義が、意味のつながりがめちゃくちゃなまま並んでいるのが目に入るからだ。

語り手 3 こうして、画数の少ない二種類の日本の表音文字が、漢字から派生し誕生した。カタカナは角ばって堅い感じがするのに対して、ひらがなは優しく、やわらかく、丸みを帯びている。一千年ほど前、平安時代の女官たちは、ひらがなを置いて「枕草子」や「源氏物語」といった不朽の文学作品を著した。

語り手 1 表音文字「かな」は様式の革命をもたらした。漢字の直線的な配置が消えたのだ。筆は水のように紙の上を流れ、個々の音節の響きを強調する。こうした空間の自由な分割は、今日まで日本の書芸術における様式上の重要な手段となっている。

祥洲 「書は柔らかい文化です。紙は柔らかくて繊細で破れやすい。だから筆先は柔らかい動物の毛でできている。それに対して欧米の文字文化は、先の固い万年筆を使う。紙はパルプでできていて固い。だから欧米の文字文化は固い文化なのです」

- 語り手1 四宝の二つ目は、和紙、紙だ。コウゾやミツマタの樹皮から作られる。小説家谷崎潤一郎は次のように書いている。
- 語り手3 「紙と云うものは支那人の発明であると聞かすが、われわれは西洋紙に対すると、単なる実用品と云う以外に何の感じも起こらないけれども、唐紙や和紙の肌理を見ると、そこに一種の温かみを感じ、心が落ち着くようになる。同じ白いのでも、西洋紙の白さと奉書や白唐紙の白さとは違う。西洋紙の肌は光線を撥ね返すような趣があるが、奉書や唐紙の肌は、柔らかい初雪の面のよう、ふっくらと光線の中へ吸い取る。そうして手ざわりがしなやかであり、折っても畳んでも音を立てない。それは木の葉に触れているのと同じように物静かで、しっとりとしている」（「陰翳礼讃」より）
- 語り手2 / 語り手3
- 「書き出した瞬間？解放感です」
- 「プレッシャーもあるしわくわくもします。半紙は白くて神聖なもので、そこに自分が筆を置くのはためらわれます」
- 「本当は無でいたいのですが、頭の中はざわざわしています」
- 「緊張しています。書こうとしている文字のことを考えます」
- 「普段と全く違う集中の仕方をしているので、紙や筆先が拡大して見えるような、不思議な感覚です」
- 「最高の集中の瞬間です」
-
- 祥洲 「何もないところを作る」
- 「日本語ではそれを『間』と言います」
- 「白い紙に上手く余白を作る」
- 語り手1 芝居における静寂の瞬間。音楽における二つの音の間。書における余白。これらに共通するのは、周りのものを生き生きと浮かび上がらせるという点だ。
- 「間」は日本の美における基本原理であり、音楽、芝居、絵画、書における主要な造形手段である。
- 語り手2 書に関する第二の次元は、時間的なものだ。一度書いてしまえば、二度とやり直せない。その点、書は音楽と似ている。更にもう一つ、時間的側面がある。
- ヤスパゼン 今日は手本を書き写す「臨書」を練習する。書道で最も重要な練習の一つだ。臨書は、古の大家の手本を元に目と技を鍛えるものだ。
- 祥洲 「この練習では、面白い経験ができます。写すものが百年経っていようが

- 千年経っていようが、はるか昔に書いた人と同じことを追体験できる。これは書の大きな魅力です」
- ヤスパゼン 私たちは、中国明朝の王鐸の字を練習した。練り上げられた、勢いのある筆体だ。紙の上を線が勢いよく滑り、まるで墨が乾いたばかりであるかのようだ。
- 祥洲 「壁のミロの絵を見てみてください。どこで筆を入れてどう描いたなんて誰にも分からない。それに対して、書の書き順は昔からほとんど変わりません。書き順が分からなくても、筆の運動の軌跡を観察すれば、どう動いたかが読み取れます」
- ヤスパゼン たとえ正しく書けなくても、漢字は私に魅惑的な絆を感じさせてくれる。昔の中国の書家と同じことをすることで、その人を間近に感じるのだ。白い半紙の前に座り、筆を墨につけ、四百年前の漢字をなぞる。私が一番苦労したのは「迷」という漢字だった。

- 添田 「お酒がいい、ビールがいい？」
- ヤスパゼン では熱燗をお願いします。七時過ぎ、寒い冬の朝。私たちは蕎麦の屋台に座って朝食をとった。添田さんは京都最大の蚤の市を案内してくれた。彼は表具師で、硯の収集家でもある。
- 語り手1 硯。書道の文具四宝の三つ目。筆は消耗し、墨は使えばなくなり、紙は朽ちる。しかし硯は半永久的に残る。だから硯は、収集家の垂涎的なのである。
- ヤスパゼン 身体が温まったところで掘出物探しに出発だ。中国の硯。二百年ほど前のものかもしれない。三万円。添田さんは高すぎる、駄目だと手を振る。
- 添田 「おはよう、今日は硯を持ってきていないんだね？——ああ、雨が降ると思って全部出さなかったんだね。——雨が降ったって硯石は大丈夫でしょう！じゃ、行きましょうか」
- ヤスパゼン 中国人の業者二人が硯石を売っている。よさそうに見える。添田さん、値段はどうですか。
- 添田 「難しいね」
- ヤスパゼン 高すぎますか？
- 添田 「安いと思ってたら買うよ」
- ヤスパゼン 今日の添田さんはいなかった。おまけに朝食の保温効果も薄れてきた。そこで添田さんは、私を自分の工房に連れて行って秘蔵の宝物を見せてくれた。緑色の筋が入った赤系の石。白みがかかった石紋のついた濃茶の

- 石。漢字，草木模様，龍の豊かな装飾が施された石。
- 添田 「この硯は青磁です。有名なコレクターに見てもらったら，唐時代のものだろうということでした。つまり千年以上も前ということになりますね」
- ヤスパゼン 一見あまり目立たない，小さな硯石。翡翠色の，透明に輝く釉。手にとるとずっしりとくる。
- 添田 「これは蚤の市で見つけました。売った人はあまりよく分かっていなくてとても安く売っていました。本当はどれほどの価値があるのか，知りません。知ったら欲が出ますしね」
- 西邑由記子 寒椿
硯ささやく
息の翳
-
- ヤスパゼン 宿題。床に座る。低い机の上には，黒いフェルトの毛せん，半紙，文鎮，筆。硯石の表面を水で濡らし，墨を摺り始める。墨にはほのかな香りがある。部屋にはさっぱりとした香りが立ちこめる。書こうとする字を眺める。磨った墨が硯のくぼみに集まる。真っ黒だ。筆を手にとり，墨に浸す。息を吸い込み，書く。間違えた。そのまま書き続ける。書いたものを眺める。最初からやり直す。「書く」というのは疲れる作業だ。同時に，筆が半紙に触れる様子や，半紙が黒い墨を吸い込む様子を見てみると，「書くこと」が簡素さを究めた形で感じられてくる。
- 語り手1 筆跡は，書いた人について多くを語るものだ。
- ヤスパゼン 私の筆跡がことさらに曝しているのは，せっかちな性分だろう。
- 語り手1 どの線にも始まりがある。筆を置いたら，球を投げるときのテイクバックのように，少しだけ進行方向と逆に運ぶ。それから画を引く。
- ヤスパゼン 手は，指先で筆を真っ直ぐに持つ。ちょうど生卵を持っているような手の形にしなければならないのだが，そうすると私の筆づかいはふらふらしてしまう。
- 語り手1 書に直線はない。そこから緊張が生まれる。
- ヤスパゼン 息を止めなくてはいけないのを忘れてしまう。
- 語り手1 線の強弱。少しでも力を抜くと線は細くなり，ほんのわずか強く押さえると太くなる。
- ヤスパゼン 足がしびれたかな？
- 語り手1 筆は，線の終わりに来ると特別な動きで止める。
- ヤスパゼン 次の線に進もうとしたが，筆先が元の形に戻らない。曲がったままだ。画

がぼやけてしまった。

祥洲 「止めるところが甘くなっています。線を引くのは風船を膨らますようなものです。最後にちゃんと栓をしないと空気は抜けるでしょう。同じことです。筆を止める瞬間を意識する練習をしてください」

ヤスパゼン 何かを達成したり、目的を遂げるのが大切なのではなく、目的から解放されることが大切なのだ。頭ではそう分かっているのに、できない。墨跡を鑑賞する。

語り手2 「墨跡」。禅僧の書をこう呼ぶ。誰かに気に入られようと書かれた字ではない。美的価値ではなく、簡素さと真実を追究したものだ。墨蹟の書家は長年の鍛錬を通じ、学んだものから悉く解き放たれ、優美な洗練さとはもはや全く縁のない、極めて独特の様式に近づいていった。

語り手1 一休禅僧は十五世紀の日本に生きた。自らを「狂雲子」と称することもあった一休の書は、荒削りで、猛々しさすら感じさせる。字には、時の権力者に反抗した彼の反骨精神がにじみ出ている。

語り手3 一棚頭上現全身
或化王侯或庶民
忘却目前真木樞
癡人喚作本来人

(一休宗純。加藤周一著「日本文学史序説」より)

語り手1 書における四つ目の宝は墨だ。黒い長方形の塊。様々な木材の煤と膠を手でこねて固めたもの。しかし一口に黒といっても一様ではない。灰色に近かったり、青みがかっていたり、かすかに茶色が入っていたり。墨とは影であり、影から飛び出す全てのものが姿形を得る。

西邑由記子 白梅や
墨芳しき
鴻臚館

(与謝蕪村)

語り手1 硯石に溜まった墨汁は、光を吸い込みそうなほど真っ黒だ。墨は、半紙の上では影のように映る。影は、静かで無音のときもあれば、叫びと化すこともある。ときには踊り、ときには憩うが、決してじっとはしていない。影は、過ぎ去ったことや想いを表す。物や思考を表す。好奇心を呼び覚まし、そこに迫ってみたいと願わせる。

語り手2 / 語り手3

「どうして書道の勉強を続けているか、ですか？私は主婦なので、書をす
る瞬間に日常から離れられるんです」

「精神の鍛錬です」

「書くと自分自身が感じられます。自分にブランクがあってびっくりさせ
られます」

「やればやるほど新しい課題が出てきて、課題によって自分の実力が測れ
ます。終わりがありません。そういう奥深さに惹きつけられます」

「字が下手だからです」

「子供のころに始めたのですが、大人になって初めて、筆で自分を表現で
きる楽しさを覚えました」

「亡くなった母が書が大好きだったので、書をしていると母と一緒にいる
ような気持ちになります」

「書があるおかげで毎日が楽しい」

祥洲 「練習では何千枚と書きますが、作品の場合は違います。一点、一度しか
書きません。作品は、私の身体の中で何年もの間醸造され、出るべき時に
出てくる」

語り手1 祥洲の書の準備は、墨を作るところから始まる。墨を自分でこねるのだ。
手は真っ黒になる。

祥洲 「三、四日アトリエにこもります。電話を切って、スケジュールも空ける。
好きな音楽を聴いて、日常生活から完全に離れる。そうしていくなかで心
が静かになり、墨を磨る。そのときに筆をとり、呼吸を止めて身体の中の
エネルギーを凝縮させようとする。その瞬間に何かを考えれば、全ては失
敗です。書くこと自体はわずか数分。書き終わってふと我に返った瞬間、
そこに文字が現れているというのが最高の状態です。私の作品特有の表現
は、墨の乾燥プロセスによっても生まれます。風が入るだけで墨の表面が
偏ります。作品が乾くまでそばにいます。一日のこともあれば、三日かか
ることもあります」

語り手2 最後に作者名の印を押す。黒、灰、白色の紙面に赤く輝く優雅なアクセ
ント。雅印は、作品に息を吹き込む。

語り手1 祥洲の作品に、五十枚の紙から成るものがある。五十回、「風」という文
字が書かれている。五十枚とも同じ字。なのに一枚一枚が全く違う。さま

ざまな筆を使い、墨のニュアンスも異なり、動きの強弱や速さもまちまちだ。

- 語り手3 嵐に打ちつけられた木のような字。
- 語り手2 岸に打ち寄せる波のような字。
- 語り手3 風に舞い上がる木の葉のような字。
- 語り手2 優しい春の息吹のような字。
- 語り手3 具象的だったり、具象的でなかったり、読めたり、読めなかったり。それでも全て「風」。
- 祥洲 「読めても読めなくても、書には常に、意味と構造を持つ漢字が基礎にあります。書というのはあくまでも文字を書くことなのです」
- 語り手3 これが、欧米の抽象画との違いだ。いかに抽象的に見えても、書は常に、数千年の歴史を持つ漢字に基づいている。漢字の力が内在し、共鳴する。
- 語り手1 七十年前、一人の書家がこう語った。「字でも絵でもない或るもの」。書家比田井天来は、日本の前衛書の創設者だ。前衛書は第二次世界大戦後に隆盛期を迎え、ポロック、スーラージュ、アルトゥングなどの芸術家にインスピレーションを与え、彼らからも刺激を受けた。形や素材、色まで使って実験を行った。文字から離れ、抽象化し、筆を使って書き、アルカイックなものに新しい力を捜し求めた。
- 祥洲 「文字か非文字かというのは、私にとっては大きな隔たりではありません。しかし日本では普通、書家は書を書き、画家は絵を描き、写真家は写真を撮ると思われている。では、私はどうなる？ギターを弾くこともあるし、絵も描くし、講演もする。私は何なのか？カテゴリーには縛られたくない」
- 語り手1 だから祥洲は「書家」ではなく「墨アーティスト」と自称している。
- 語り手2 蛇行して流れる墨の跡。立体的にすら見える表面。飛び散った点々。曲がりくねり、真っ二つに割れた線。深い黒色と淡い灰色の間を行き来する、多層的でリズムカルな構造。「Inspired by Music from...」シリーズだ。ビル・エヴァンス、キース・ジャレット、ピンク・フロイド、エリック・クラプトン、キング・クリムゾン、ジミ・ヘンドリクスの特徴。墨・イン・ブルース、墨・イン・ロック、墨・イン・ジャズ、墨・フリオソ。
- 語り手1 こうしたやり方は、伝統主義者たちからあまりよく思われていない。
- 祥洲 「自分の作品は、書道会など眼中にない」
- 語り手1 祥洲は、日本でも指折りの著名な書家の門下で一番弟子だったのだが、輝かしい経歴の初期段階で狭い伝統の世界を離れたことで、長い間反感を持たれていた。

- 祥洲 「若い人に人気があるのは、私の作品のせいだと思いたいですが、もう一つ書道会には、高齢化している、お金がかかって自由がない、というイメージがあります。対して、私のところではのびのびできると」
- 語り手1 iPod や CD カバー、エレキギターのデザイン、ドイツ高級車メーカーのCM用墨絵などによって、祥洲の人気は書の世界を超えて高まっていった。彼のホームページにはこれまで百万件以上のアクセスがある。
-
- 祥洲 「あの若者の格好は、もういろいろご覧になったでしょう。この間は、頭半分の髪の毛がなかった」
- ヤスパゼン 若者は、初めて見たときから目立っていた。頭の半分だけ坊主刈りにし、重そうなネックレスをつけ、ズボンを思い切りずらして穿いている。
- 祥洲 「元ヤンキーです。小学校のころから通ってきているので、私は父親代わりでもあります」
- ヤスパゼン 祥洲に丁寧な挨拶をするでもなく発した声が、「ウス」。空いた席に座り、半紙を広げ、墨を磨った。
- 祥洲 「親心としては、地道に働いてくれれば嬉しいのに、何とプロになると言っています」
- ヤスパゼン それから若者は、繊細な手で、千年前の悲歌を書き写した。秋の風に舞う木の葉と、飛びゆく鳥のいたいけな姿を歌った悲歌だ。
- 祥洲 「もうすぐ初個展をやるそうなので、お時間があったら是非お立ち寄りください」
- 語り手1 ヒロキは二十六歳。国語と書道の教員免許を持っている。一年前までココラの社員で、自動販売機の補充をしていた。
- ヤスパゼン ヒロキや多くの若手アーティストは、新しい道を模索している。舞台に立ち、太鼓奏者、ロックミュージシャン、舞踏家と一緒にライブパフォーマンスを行うこともある。彼らのそのようなやり方に共感するのは、日本古来の書という芸術は受け入れても、伝統的な宗派には背を向ける人々だ。なかには、ポップスターのようにメディアでもてはやされる若いアーティストもいる。
-
- ヤスパゼン 私は再度、中国の古典を手本にして練習した。そして再び新たな発見をした。
- 祥洲 「字全体を絵、デザインとして見て、形を写し取ってみてください。これは大分上手くいんだけど、これをよく見てみて」
- ヤスパゼン 一見したところ、それは左右対称に窓格子で分けられた四角い窓のように

見えた。

祥洲 「現代人は、左右対称の活字を見慣れている。しかし本当の美とは、バランスがくずれたところにある。例を書いてみましょう」

ヤスパゼン すると私には突然、文字が全く違った風に見えてきた。四角の中の格子は、真中ではなく真中をはずしたところにあり、格子の線はわずかに曲がっている。真直ぐなもの、対称なものは何もない。均衡は不均衡の上に成り立っている。まさにこれが、字を生き生きとさせるのだ。至極簡単、そしてとても難しい。

祥洲 「次の個展で発表する作品を書いたところです。三つの漢字です。書、有、道。『書に道あり』という意味です」

ヤスパゼン 祥洲はこの三つの漢字をスキャンし、コンピュータを使った複雑なプロセスによって、岩の表面に刻まれ、風雨に晒された古の時代の漢字と重ね合わせた。デジタル技術、現代の書、そして全ての礎である古の文字の合成だ。

祥洲 「これまで私は長年、墨の抽象作品を展開してそこに美を探してきましたが、今は再び文字を書くことに戻ってきたところです。つきつめてみると、たった一本の線にすべての表現を込められれば、抽象画よりもより深い世界を表現できる。そこに到達するのはとても難しいけれども、そこに最大の味わいがあると思います」

(おわり)

,Writing is the Way'

Malte JASPERSEN

Abstract

Radio documentary feature was brought to being in postwar Germany as a new form of acoustic art. Unlike radio drama, the feature focuses on non-fictional facts, using unlimited formal possibilities: music, spoken language, sounds in varying combinations and emphasis. John Theocharis, former head of the feature section of the BBC, says, 'A feature is a work using the various resources in radio in order to set the listener's fantasy in motion and deepen his perception of the world and human existence'.

The text 'Writing is the Way' is based on the manuscript of the radio documentary feature of the same title. The work is the result of a long research in the world of calligraphy, the nature and history of which is almost unknown to most German radio listeners. At the same time, it represents an exceptional attempt to display an

absolutely visual topic on radio and thus enrich and deepen the German audience's image of Japan. 'Writing is the Way' has been recommended by the Berlin Brandenburg Broadcast Association (RBB) as the entry for the international media festival, the „Prix Italia 2009“

Keywords : Calligraphy, radio, documentary, culture, mass media